

三河アララギ

平成二十三年

十二月号

第五十八卷 第十二号



ニューヨーク日記(62) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 1, 2011 : Dia de los Muertos

Blue Shoe Diaries



ハロウィーンの次の日はメキシコでは死者の日（3日間続くのかな?）。日本のお盆と一緒に。メキシコまで見に行ってきました! 骸骨をテーマに作られた物が沢山。砂糖の頭骸骨、陶器の骸骨、などなど。家族で夜お墓に行って親族と時間を過ごす習慣。夜はもう寒いから焚き火炊いたり毛布にくるまったりしてロウソクやお花を沢山お墓に飾ります。こんな感じならお墓があるのも分る気がする。本当のお墓参りだな。

We came to Mexico City for the Day of the Dead this year. Each culture has their own way of remembering the dead and Mexico does it beautifully. You see skulls and skeletons adorned the entire city. Lots of candles to light up the graves. Lots of flowers adorning the graves. It's tradition for family to go hang out with the dead all night at the cemetery telling stories and just being there. Makes you realize why there are graves in the first place.

目次

第五十八卷第十二号(通卷六九六号)

表紙 葦

ニューヨーク日記(62)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

歌集・二本の木

秋の日

柚餅子

素粒子

次郎柿

戻り来し

味方

緋の布を

竜胆の花

螭螂

お礼に何ふ

祭礼

海苔

わが父は

なまぬるぎ

神無月

秋の訪れ

南仏

偲ぶ

持て成し

今泉 由利(1)

Blue Shoe(2)

杉浦 弘(5)

岡本八千代(6)

白井 久吉(7)

今泉 由利(8)

伊藤八重子(9)

弓谷 久子(10)

青木 玉枝(11)

内藤 志げ(12)

林 伊佐子(13)

安藤 和代(14)

胃甲 節子(15)

清澤 範子(16)

伊与田広子(17)

半田うめ子(18)

金津 文枝(19)

近藤 映子(20)

伊藤 忠男(21)

北川 宏廸(22)

杉浦恵美子(23)

堀川 勝子(24)

早起き

黄金の原

繭

田原西陵(2)

花壇

現代学生百人一首

「ことよせ」

贈呈誌 十月号

「俳句」

絹の話(12)

物理学者と詩歌の世界(23)

斎藤茂吉と御津磯夫 三

和歌から派生した季語の本意(その十七)

「氷魚」のことから(131)

ことのはスケッチ(396)

和菓子街道(62)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

平松 裕子(25)

山口千恵子(26)

小野可南子(27)

夏目 勝弘(28)

秋山 逸穂(29)

東洋大学(29)

いーはとぶ(30)

阿部 淑子(30)

白井 信昭(30)

植村 公女(32)

一石(32)

喜仙(33)

皓一(33)

今泉 雅勝(34)

一石(36)

鮫島 満(38)

佐藤 喜仙(40)

岡本八千代(41)

今泉 由利(42)

平松 温子(43)

(44)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

のりものみな坐りたるよろこびて二日の旅の夜をかへりけり

P
186

六時すぎまで夕茜ありもらひたるかたきもちひのいつたのしく

P
187

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

宇宙にも星にも疎く老い耄けてハレー彗星近づくに逢ふ

誰が築きたれ祀りしか積石の埋もれて過ぎし千五百年

胸に組む智拳の印の指の上に八百年は一瞬に過ぐ

秋の日

蒲郡 岡本八千代

「秋の日のジオロンの」とよ口ずさむわれにその音ねのきこえくるごと
いとこらと長く長く逢はざりき今日こそ相逢ふ何をか語らむ

女三人みたり寄りて語らふはなしの中悪口などの無きが淋しゑ

車にて帰るいとこらを見送りぬ何とも言はず手をばふりつつ

また今年も関谷の葡萄を送りくれぬああ浮かびくる彼の童顔

一房のぶどうの一つふふみたりしみじみと浮かぶ童顔の彼が

数へ子のくれたる墨の「名花十友」つひに無しなり「友」といふ文字

墨減りて「友」の字の無き墨を磨り先づは書かねばならぬ礼状

庭中に草取るわれの影法師うごきつつあり秋の昼照り

くれなるの萩もこぼれてしまひたりしばしを待たむその葉の黄金こがねを

柚餅子

新城 白井久吉

靴下を履くさへ容易ならざるも長生きをしたる証と思ふ

岡崎の娘が来り手作りの柚餅ゆ子もありぬ土産の中に

軒低き田舎店屋の駄菓子ほどうまきに優る物は今なし

川端の田は洪水を冠れども米は半作より多かりと

見端もよく味もまたよし夕食のアジの干物にスダチをしぼる

刈取りの終りたる田の堀溝に白く見ゆるはトゲソバならむ

来年のことはわからずしかれども野菜や花の種子を採り置け

今を咲く秋明菊は花だけを手にとり見ればまこと美し

一日だに仕事せざるも新米を神に供へて皆でいただく

元住みし跡地の隅を耕してエンドウ植ゑむ珍らしければ

素粒子

東京 今泉 由利

まっ黒の捻りはコロコロ転がれり蓮の台を零れこしもの
枯れしもの手繰り寄せをり長し長し水道水にひと夏延びし
実感は無きままわが身を眺めぬる私をつくる素材素粒子
分割は不可能にして最小単位然ういふものにはじまりしこと
何にでも成り得る可能性はもちをりぬ私に成りし素粒子親し
パキパキとギンナンを割る音させて恐竜の頃思ひを馳する
何味も加へることはせぬままに噛み噛む噛み噛むギンナンの味
半分半分質を異する洪皮を剥ぎていでこしギンナン翠
大気圏再突入の衛星に当たるかもしれぬ当らぬかもしれぬ
金箔を張りてをりたり息ころし裸婦は次第に仏像となる

次郎柿

豊川 伊藤八重子

その昔お駕籠も往きし東海道御油松並木をデイケアへ行く

存ながらえて娘の家に見上ぐる秋の空沁みじみこぼるるこころの涙

オクラの花を喰ひ尽くしたる青き飛蝗ぼったこの一匹も命を保つ

「どうだん」の紅葉映ゆる昭和村車椅子にて押されて行けり

昭和村に拾ひ来たりし柿紅葉わが家の机上に枯葉となれり

師のきみの提げ賜ひたる球根の彼岸花の白此の秋咲かず

懐かこの温ちほかかりき父母ちちははをしきりに恋ふる八十五歳

茄子び二つ団扇に画きし友よりの夏の想ひ出蔵はむとする

裏庭の木に残されし次郎柿一つ挽あまぎたり甘うましよ甘し

庭の木を子が剪定し夫が草引く半月振りに我家に帰れば

戻り来し

豊川 弓谷 久子

いつせいに咲きて香り満ち満ちて金木犀はいつせいに散る
ゆうあいの里にて逢はむ同窓生 たった六人だけとなれども

どこまでも黄の花続くどこまでも泡立草は線路に添ひて

また雨となるやも知れず神無月今宵満月ほの紅く照る

雨音かと耳澄ましたりながながと夜行列車の走り行く音

取り入れも終りし頃か雀等が我が家のパン屑に戻り来し声

子の登る脚立を我が支えをり雨もる樋を今日は直さむ

より近く斎藤茂吉を思ひつつ「榆家の人びと」読みし日ありき

ホトトギスの花が咲きたり「ホトトギス沓手鳥孤城落月」の舞台を憶ふ

秋らしく今朝冷え込みぬ編み直すセーター解きをり日向の縁に

味方

伊丹 青木 玉枝

しみと皺ふえる吾が手を眺めつつこの手愛しく指輪が光る
母の背に受けし教への数かずを残り世のわれ今はなつかし
雑巾の出番すくなき今の世に吾が部屋だけでも雑巾の掃除
車椅子に夫を乗せ行く老夫婦とてもいい顔石畳の散歩
いまだ灯を点さぬ部屋に帰り来て仏花の水仙黄菊に安らぐ
武庫川を見たくて今日はバスに乗り終点までの一人旅
杖という味方があれば武庫川の広き流れも一人楽しむ
ベランダに黄菊白菊咲き盛り天気予報は秋日和告ぐ
「あのそれは」出かかった言葉引つ込めて嫁に無難な言い方探す
ゆきすぎしあとより気付く香りあり金木犀の甘き香りが

緋の布を

豊川 内藤 志げ

北の窓白一色の雲の中本宮山の頂さやか

椿の実三つに爆ぜり黒き実をぽつんと一つ静かなる日に

台風の進路を予想し播く日日ひにち蒨草の種水に浸しぬ

芽出しする蒨草に白き根の見え始めたり畑は湿りに

塊つちくれのこなれぬままに播種機押す時々車輪に塊はさまる

アララギの絹の話に魅せられて緋の長襦袢を衣裳函より

絹の糸軋ませ解きゆく長襦袢一枚長き一布

緋の布を足首に巻き床に入る冷えたる足にほのかな温み

ツケマツゲミニスカートにスニーカー五十路過ぎたる娘は踊る

藪陰に蒨草を採る膝に心地よきかな微かな温もり

竜胆の花

岡崎 林 伊 佐 子

竜胆も千振も咲く山の道およぶ光は秋となりたり

千振の白き小花の咲く山はわれに親しく老いの安らぎ

ミゾソバの淡紅の花の群れ咲きてがよのまつはる夕べの畑に

薬害を想へば菜につく虫あまた腰のばしつつかけて取る

物の余る時代となりて間引して畝間に捨てる赤かぶ白かぶ

親指とひとさし指をあくに染め紫蘇の実を扱ぎ塩漬にする

人影も見ぬふる里の屋根の上小猿一匹われを見おろす

三才の雄かと思ふ親元を離れて甘柿とりにきたらし

ハンターの時季近くなり山猿見れば命をおもふ

畑にて休むひととき鍬の柄に止まる蜻蛉よ終の姿か

蝋 螂

豊川 安藤和代

台風によじれし茄子に小さき花小さき実のなり小さき秋来る

千日紅の葉に白線の描かれてお絵書き虫の巧みなる技

夢に見し嫁は孫等をほめてをりあの日と同じ声の明るく

スーパーに里芋ひとつ七十円急遽変更肉じゃがにする

短か日の石巻山は夕焼けを返して実りの稲田輝く

吾の飼う鈴虫の音の響きをり夜の廊下は明るく更ける

ささやかな喜びあれば夕焼けに今日は全身茜に染まる

温かき飲み物ほしき今朝の冷え夫はひとりで紅茶入れをり

木には茶の葉には緑の蝋螂がひっそりといて冬に入りゆく

冷やかな日びの続けばコトコトとシチュー煮込みて帰る孫待つ

御礼に伺ふ

豊橋 胃 甲 節 子

日の過ぐる速さを言ひて笑ひあふダスキンレデイは若きママさん
晴れ渡る空よ故郷も秋祭帰省も叶はず歳月経たり

珍らしき花と問はれしモクセンナ十二号台風にて枯れ果てにけり

思ひ悩み思ひ苦しみ幾日も気弱く苦しみ決め兼ること

後片付けすぐ済まさねば気の済まぬ私がいつしかしばし横たふ

寂しき老後を送らむ為に帰つておいでと繰返し繰返し吾が弟は

走馬燈の様に想ひは駆けめぐる良き事のみ過去の過去にあらねど

戴きたる尾道のお土産嬉しくて椿の花持ち御礼に伺ふ

開け放つ窓より流るる木犀の香りふんわり夜のバスタオル

お土産の日間賀の鱈の鮮度良き干物は旅せぬ吾には嬉しく

祭 礼

春日井 清 澤 範 子

月に一度診察に行く病院の窓から桜葉色づき見ゆる

自転車に乗り行く涼し川辺りの土手に一群萩ひとむらの花見ゆ

八王子神社の祭礼に夫と詣で神主様の祝詞のりと聞くなり

境内の木立の中に舞台あり紅白の幕風をはらみて

八王子神社の祭礼に夫と吾祝詞のりと聞く時心地良き風

八王子神社の祭礼に夫と来て紅白饅頭いただきました

祭礼の日は穏やかに晴れ渡り静寂の中賽銭の音

黄砂とぶ予報に洗濯思案して廻り廊下に陰干しをする

吾が夫の勤続表彰に戴きし時計五時さす夕食の仕度

自転車に乗り行く道に刈り株のひこばゑの青かすかに揺れる

海苔

豊橋 伊与田広子

十月の二十日過ぐるも暑きなり半袖のブラウス着て過ごす

近頃の季節はづれの温かさ東海地震心配となる

地震だとわれに叫びて飛び出しし母に従ひわれも飛び出しき

わが近く地震に強きモデルハウス関心のありしばしば見に行く

建てしより三十年のわが家いえよ東海地震を心配しをり

わが地区は津波に対し黄信号最悪にしてどの程度かと思ふ

震災をテレビに見入る残る家わが家と同じパソコンなのかと

四つ切りの海苔巻作りイクラ入れわさび効かすはわれの好物

海苔巻きは巻きて直ぐ食ぶるが旨きなり海苔のかほりの豊かなるうち

昨年は日照りに実落ちし柿の木は今年実をつく二本の柿の木

わが父は

新城 半田うめ子

戦時中の食品不足にわが父は苦しむ人へ無償にて渡し

吾が父はうどんを好みし若き日の吾の作りしを喜びて食む

下駄をもて殴られたりき痛かりき若き日の思ひ出なりし

黄の色の稲の上にて鳩一羽舞ひてゐるなり楽しみ眺む

わが孫の食品楽し又今日も料理上手の美味きと食みぬ

幼き日に幼なじみの源二郎金づちをもち吾を追ひ来ぬ

思ひ出す隣屋の犬の可愛かり川の堤を走りてをりき

老い呆けて時折り忘れる散歩道右か左か分らぬ時あり

今朝も又飲みてゐるなり胃痛にて太田胃散をくせとなりたり

なまぬるき

島根 金津 文枝

わが配膳表を見て栄養士さん病室へ見舞に来て戴き懐し嬉し

糞尿の処理するナース便器提げ処理場へ急ぐ深夜

入院より十七日振り夕食カレーなり久々楽しみ食べる

神在りの名月ナース午前二時足忍ばせて廻診す

群雀なだれ八幡宮森に潜むらし急に賑やか

住む人の無き隣家に熊蜂四五匹しきり出入す終日

わが住ふ市町村の百円バス老人は買物に便利に出で行く

島根県原発見学に行きしは遙か海水に手をつけなまぬるき思ひ出

祖父の祥月命日本魚出し祈る九月六日九十才の朝

戦時中食糧難にて米粒を五十回噛む規則だった

神無月

名古屋 近藤 映子

我夫は物言えずとも左手のわれとの握手に力あり

八階に晴れたる青空見上げつつ布団を干したり毛布も共に

午后三時ふつくら布団取り入れる風早や冷んやり頬をなぞ

冬掛けの蒲団は重し昨日までの夏掛布団に今夜はお別れ

もう少しもぐって居たし布団の中連休朝は娘と共に

秋雨と言ふには激し雨足を傘にてよけつつバス停に

夫見舞ひバス停に向ふ傘を打つ雨音高し大つぶの雨

もう秋よと夫にゆっくり話し掛け左手同志の握手の力

エレベーター降りて玄関出いでた処金木犀の香に迎へられ

我夫を見舞ひての家路の風当り淋しくジーンと冷えぬ

秋の訪れ

大阪 伊藤忠男

大地揺れ大雨耐えし彼岸花時きたりたり燃えさかるなり

山里の秋は寂しき風が吹く冷えし秋こそさらに寂しき

温もりに未練残すか迷い床覚悟決まらぬ冷え込みの朝

ナフタリン匂う背広に秋きたる冷え込み朝の満員電車

パン生地をこねてこねつつ窓開けて爽やか秋の風招き入れ

誰も言う彼岸は寒暑分ける時巡り巡りしこの年もまた

丹波やま実りさがして汗を拭く手ぬぐい秋の風受け乾く

葉音せず雲一つなく風途切れ時止りたか秋晴れの日は

柿と栗冷え込みありて甘味増すぬるま湯なればこの実熟さず

栗のイガ掴み痛さが身にしみるこの実守るは針の鎧で

南 仏

東京 北川 宏 勉

南仏の青空を入るる隙間なしズームの中に映るわが妻

カルカソンヌの光る中で城壁にわたくしの影くの字に映る

南仏の熟れたぶどうの粒々はどうして楕円を描くのだらふか

少しづつ母のどこかが変はりゆくわたしの連載読まなくなりぬ

手押し車のカゴに財布を入れたまま母はお金を使ふことなし

きのふまでは夏だったのにと云ひながら日射の方に母を動かす

ひじ掛けに身を預けなば舟を漕ぐ母の寝癖をゆづり受けたり

友が去り一年経ちしことを知る金木犀の香りゐるころ

七十年生きし証に「鉄舟」のホームページにわが名を残す

空港の動く歩道に乗りてなほ足を早むる癖は直らず

偲ぶ

蒲郡 杉浦恵美子

写真立ての夫の笑顔が哀しくて散骨報告涙ぐみつつ

この広い平野の何処にも夫は居ぬ台風一過の秋空の下

独り居は昼間も雨戸を閉めたきり灯明のみがひっそり息づく

夫の居ぬこの家に独り暴風が裏藪揺さぶる音聴いて居り

缶ビール供養のために呑むからね冷蔵庫中一年経しもの

賞味期限とつくに過ぎし缶ビール美味い訳なしただ只夫偲ぶ

指輪など関心薄い我なれど夫の形見となれば愛しき

新聞もざっと見すればもうお仕舞い夫居し頃は奪い合いしものを

茶の友に紫蘇の実ぶちぶち舌触り独り居昼餉のつれづれのとき

紫蘇の実を舌にまろばせ昼餉後の物憂いときをもてあましをり

持て成し

豊川 堀川 勝子

普請進む現場にあれば顔見知る人のをらざり吾疲れ果つ

持て成しは「手作り菓子」と一人きめ普請の現場に足繁くゆく

縁ありて我が家に係る人みなの日替わりメニューを思ふは愉し

小山なす古家の名残黒き土花咲く種を蒔きたくなりぬ

いっせいに萌え来し葱のさみどりに水細やかに注ぎゆくなり

採り残す木守りの柿に陽の射して燿きいっつ温もりのあり

足元に咲き居し低きホトトギス気付かぬままに秋過ぎてゆく

己が手にしっかり馴染みし鋤握り庭の普請は我とわが夫

ベランダに吊せし渋柿数増して赤ら陽に染むわが小世界

舳ひ舟に水の光が反射して盗られしカバンふと思ひ居る

早起き

豊川 平松 裕子

太平洋の波にけぶれる潮見坂一気に越えて愛知県に入る
愛知県に入りましたとナビの声スピード落とし左折してゆく
赤信号に並びて止まり右左手を振り合へり別れてゆくかな
ますますに細く冴えたる有明の月仰ぎつつ洗濯物干す
未だ暗きやや西方の空に著きオリオン座を見て今日の始まり
闇の中に白く立ち立つ秋明菊心に決めし早起き続けをり
持ちてゆくものなければ庭に咲く秋明菊を丈長く切る
何知らず東に走る我に届く携帯メールは夕日を見よと
変はりゆく東雲の空を楽しみつつ私の車のスピード合はず
走り来て早や二時間か掛川の街並を背に朝日昇り来

黄金の原

豊川 山口千恵子

飛びをりし白鷺ふんわり降り立ちぬ色付き始めし稻田の畦に

垂れ初めし稲穂さやさや風に鳴る野添の道になき人思ふ

彼岸花あかあか連なる野良の道秋は律儀にこの里にみつる

一面の稔り田広く続きゐつ今しばらくは黄金の原

秋の日に収穫すすむ佐脇の田切り刻まれし新藁匂ふ

円錐に新藁たてて干されあり残りゐしこの田も取り入れ終りぬ

朝の陽を受けて黒ぐる光る羽刈り田を一羽鴉歩めり

黒き影ときをり銀に光りつつ浅き流れの朝音羽川

秋の日に萌えくるスギナ搔きとりぬ空豆の種二十粒まく

ニンニクと分葱の球根植ゑ終へぬ去年わが畑にわが取りしもの

繭

豊川 小野可南子

七十を過ぎて知りたるひとつこと蝶はさなぎに蛾は繭になる

黄葉する枿の葉朴の葉踏みながら鳥居峠を今越えにけり

奈良井宿格子戸の前の鉢草に止まりてゐたるアサギマダラは

奈良井宿のこの薮戸しとみどを見上げしは十年の前あなたと一緒に

先達のあなた頼りの旅なりき木曾福島も奈良井の宿も

森ふかき毘沙堂を拝すときフワリフワリアサギマダラが

早採りのサヤエンドウの花花花まつはり巡る小さきしじみ蝶

鈴虫の声すずやかに鳴きとほす十月の末未いまだはまだ

X線・MRIに超短波この一年の検査つづきよ

寂聴さまの「和顔施わがんせ」とふ説法心しみじみ私もいただきます

田原西陵(2)

豊川 夏目勝弘

電柵をめぐらす峡田は実り色長く直くなる御陵への道

茶畑の整へられし緑の峡春日宮陵静もりのなか

杉柵照葉樹に小暗みさくらき陵にとび来て囀る鳥さへもなし

陵を易やさしく巡らす生垣の手入れのあとのいと新しく

東陵の方よりの風に茶畑の扇風機いっせいに回り始めり

草花の色さへ見られぬここ西陵片辺の畑に末枯れしヒマワリ

陵の御前は吾と小蛙の飛び交ふのみの音なき世界

御影石の鳥居の前にて時すごす青きトンボの寄りてきにけり

泣く涙小雨と降ればは笠かさ金村かなむらいまし晴れ間より小雨落ちきぬ

茶畑に来し軽四の通りすぐ巡ぐらす想ひの現にもどる

花壇

「招待」 秋山逸穂

夕暮れの雑草抜きたる花壇には雀むれなし土をついばむ

落としたる老眼鏡は割れにけり車中にて本は今日は読めない

畑つちに汗つぎつぎと吸い込ませ耕しし跡振り返り見る

ゆるやかな坂上りゆく商店街汗かきながら画材屋目指す

街川の清き流れを見下ろせば底にかがやく空き缶がある

現代学生百人一首 東洋大学

県外に内定決まりふと思う地元はこんな良かつたつけ

宇部工業高等学校 三年 添田智史

おなもみが自分についたらうざいなあ人につけるとたのしいけどね

雲仙市立吾妻中学校 二年 中村透

秋空の下で踊ったソーラン節はだしで大地をドンとふみしめ

佐世保市立中里中学校 一年 樋口真理沙

『ハルカ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

朝顔のつるに習性あるらしく左まはりに種つけとまれり

牧原正枝

四谷村の千枚田にけふの風の吹く稲穂の黄みどりゆれてをりけり

岩瀬信子

嫁ぎ来てはや五十年かつくづくと思ひ出すことなべて懐し

三田美奈子

a 波の出づると言ふらしCDを聴きつつ今宵は眠らんとする

稲吉友江

海の辺の砂道歩む君とわれプーケット島の浜木綿の白

鈴木美耶子

かき揚げのほど良き食感教はりし亡き母の味今宵も夕餉に

吉見幸子

原発に今年は蟬も鳴けぬかと案じし里に蝸の声

阿部淑子

秋祭りトップを吟じる敬友の朗朗として背筋ののびぬ

山道のカーブ連なるひとところ後続車をやり過すひととき

白井信昭

登らねば見えざるものを見し故に急勾配の石段くだる

贈呈誌 十月号

「秋田アララギ」

千田 千佳

魚焼く匂ひただよふ門の前花にたつぷり水与へゆく

眞野 ミチ

登り来て東の方は霧のはれ人影小さく雪溪をゆく

「秋楡」

加藤 和子

溪流の音騒がしく響きおり潜みしものの暗き声聴く

「愛媛アララギ」

大内 富士子

暑き日のやうやく落ちて夕やけの空渡りゆくだみ声鳥

加賀山ひろみ

おのづから裂けし実赤く艶めきて庭の柘榴は冬陽浴びをり

「鹿児島アララギ」

鮎川 睦子

茗荷好きの弟を言ひて庭畑に探しし母も弟も亡し

今村 節子

今朝も又樟の木の間に山鳩のくぐもれる声頻りに響く

「高知アララギ」

田村 光

ほつほつと朝の花咲く水の辺に身を光らせて羽化する蜻蛉

片岡 包女

から芋の畑一面に蔓のびて反す手元を風の過ぎゆく

「滋賀アララギ」

川端 みよ

漸くに日陰となりし裏庭に百日草の生き生きと見ゆ

中西 信一郎

草分けて見廻り為せる田の畦に潜む蝗の未だ幼し

「冬雷」

橋本 佳代子

峡の田の薬剤散布は小規模のラジコンヘリに今年変れり

大久保 修司

ローカル線の駅より家まで歩む道に満月の光わが影を成す

「柀」

南部 輝子

ほのぼのと明けゆくころを目覚めぬて聞けばわが庭にまづはヒゲラシ

加賀 要子

上り来し山の平の城の跡蟬一つ来たり止まる石文

「群山」

高橋 重行

春雨の寒さにこもる昼過ぎを炬燵を出して妻を待ちをり

布宮 雅昭

雨上り明るむ空に湧きおこる春蟬の声沢をつたひゆく

「榎の木」

寺田 シズ

盆近く入り陽の早く鍬洗ひをさめし倉庫の鍵穴さがす

田中 とき

靴に入る砂を気にする夫とわれ暑き砂丘をもどかしくゆく

「穂の原」

荒川 榮子

我が息子音楽祭にてタイコ打つリズムに乗りて楽しげにみゆ

「俳句」

台所の夫呼んでゐし暮の秋

植村公女

カフェオレ一口すすり秋扇

雲の名をひとつ覚えし野分あと

思考あり空想ありて秋の空

一石

秋光や波動とあらば干涉す

郷愁を覚ゆ煙や落葉焚き

夏果てぬ裏磐梯の瑠璃の沼

喜仙

ひもすがら倦きずに耳に秋の波

分校は閉ざされなほも小鳥来る

落栗に手の届かぬや柵の内

皓一

金柑の枝先どれも金の艶

熟柿を一つ残せりこの家も

絹の話 (12)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と光源氏

絹の歴史は繭を何とか大きくしようと努力して来た歴史でもありました。大きな繭を作り、多くの糸を採ろうとしたのです。家蚕と云う現在の白い繭は日本では約2千近く飼いつづけられ、年に2回〜4回集繭して来ましたので、4千回以上上の命のバトンタッチが行われて来ています。

その間多くの人々のたゆまぬ研鑽により、大きな繭を手に入れました。特に1945年以降目ざましい成果を上げています。実に多くの品種も生まれ、それらに合った桑の木も同時に研究されて来ました。現在の繭(糸の長さ約1500m)は平安時代のそれ(300〜400m)と比べると4倍近くの糸が採れます。しかも蚕が大きくなって来たので虫の口が大きくなり、糸は太くなって重くもなりました。めつけが絹糸取引の重要ポイントであったので、たいへん都合で

した。現在の遺伝子組替えでダチョウの玉子位の繭を作ることは可能ですが、糸が太すぎて衣料品には向きませんが、最も短時間で効率よく蛋白質を作る工場として今後が期待されて来ました。

戦後文化財の修復が盛んになりましたが、修復に予算があっても材料がなくなってしまうていました。

採算の悪い小さな繭をつくる農家がなくなってしまうては、絹に関しては、その時代の大きさの繭から採った糸を使わなければ正確な修理も復原も出来ません。

絹糸の太さが細いと艶も良く、軽い。重ねた色が現代の太い糸の場合と違って見えるのです。したがって、出来る限り忠実に修理、復原しておかないと古典文学等の色の表現の理解が誤ったものになってしまうおそれがあります。特に平安期には雪重ね、桜重ねの様な微妙な表現が多く、僅かな反射の色の違いを大切にしていたようです。

平安時代の源氏物語の光源氏は微妙な色の違いを見分ける事が出来たので、稀代まれなるドンファンになれたと思わ

れます。寢殿造りで奥を向いて侍っている貴女の顔は見えません、堀のくずれた穴から広い庭を透視して見ても定かではありません。しかし何々の君がいらつしやるからと、一句ものして、梅の枝に結んで使いの者にもたすなど、視力がとてもよかつたこともありましようが、細い絹糸で織られて色重ねした物の微妙な色の輝きの僅かな差異を識別できたのです。あの色重ねは何の君だ！と色で区別していたようです。僅かな色の輝きの違いや衣擦れの音、香の香りの違いから月の明かりや風の音、弱まり行く虫の音などをしかと区別して衣服にもそれを表現することが、当時の教養ある公達の所行であつたと思われます。

この様な能力はこの時代生きた人には等しく備わつていた様です。実際筆者は電気やそれによる音の無い生活をしぱらく、ニューヘブリデス諸島の石器時代さながらの人達と一緒に生活してみても、僅かな変化を五感で感じると云う事が少し理解出来た様に思えます。

実際に小さな古代繭の絹糸織物の色重ねと現在の繭の絹

糸織物の色重ねの投光実験をしてみました。するとやはり前者は重ねた色がはっきりと艶やかに見えました、後者は重ねた色がはっきりしませんでした。

光源氏は絹糸の弦の琵琶の音をどんな気持ちで聞いたのでしょうか。特に弦に使う絹糸は余湖（滋賀県）の水で精錬したものが良い音を出すと云われています。今でもそれは続いていますので、一般にはビニール弦ですが、やはり本職の人達は絹弦を使っています。

1990年からの正倉院御物復原に当り、当時と同様な繭が一般に無く、皇居で皇后様が小石丸と云う古代繭を育てていらつしやると云う事で、それを頂いて作業に入った事は有名です。今日でも毎年40キロお作り頂いて古物の修理や復原に使っています。そのようなニュースが流れてから、それにあやかりたい需要が生まれ、新小石丸と云う新種を作り少々高額になるのだが、和装として売られています。

皇后様に文化財復原修復に寄与して頂き、絹産業活性化にも道を開いて頂いている事に感謝するばかりです。

物理学者と詩歌の世界 (23)

一石

ハンス・ベーター

ハンス・アルブレヒト・ベーター (Hans Albrecht Bethe、1906—2005) は、アメリカの物理学者。シュトラスブルク(当時ドイツ領)出身のドイツ系ユダヤ人移民。1967年、「原子核反理論への貢献、特に星の内部におけるエネルギー生成に関する発見」によってノーベル物理学賞を受賞した。

フランクフルト・アム・マイン大学で物理学を学び、理論物理学の権威A・ゾンマーフェルトがいたミュンヘン大学で博士号を得る。1928年から同大学で教えたが、1933年にナチス支配下のドイツを脱出しイギリスに逃れ、マンチェスター大学の講師を務め、1935年にはアメリカのコーネル大学の教授となる(参考資料1)。

1940年代、「原爆の父」R・オッペンハイマー(参考資料2)に招かれ、ロスアラモス国立研究所の初代理論部長として「マンハッタン計画」で原爆の開発に深く関わった(参考資料3)。広島・長崎に投下された原爆は、「想像以上の威力だった。二度と繰り返してはならないと感じた」(96年、AP通信)ことから、戦後は一貫して核軍縮を提唱した。トルーマン大統領が水爆開発を決断した50年に反対声明を発表したほか、部分的核実験禁止条約(63年)の交渉団にも加わった。97年には、クリントン大統領に書簡を出し、水

爆などの研究が核軍縮の流れに害を及ぼすとして、「米国はいかなる種類の大量破壊兵器の開発からも手を引くと宣言する時だ」と訴えた。また03年1月、イラク戦争反対声明に加わるなど、科学者の社会的責任を強く意識して良心的に行動した。

ベーターは原子核物理学の発展に貢献し、核反理論、特に恒星のエネルギー生成論など、理論物理学の多くの分野に足跡を残した。主な業績には次のようなものがある。

- 1) 重陽子の理論を提唱し、それを拡張した。原子核の反応についての理論を研究、ボーアの複合核理論を発展させた。
- 2) 恒星内部におけるエネルギーの生成についての研究。「太陽程度の規模では陽子・陽子反応が主な反応であるが、もっと輝いている恒星では炭素・酸素・窒素サイクルが重要な反応となっている」ことを発見(参考資料4)。彼のノーベル物理学賞はこの業績および原子核物理学の研究全般が評価されたものである。
- 3) 原子核の性質を核子間に働く力によって説明する理論を提唱した。原子物理、原子衝突の理論、特に高速粒子と原子との非弾性衝突の理論を発展させ、原子核物理学に応用した。高エネルギー電子によるガンマ線の輻射や高エネルギーガンマ線による電子対の生成などの研究。
- 4) 結晶、金属、合金など固体物理学の分野でも相転移の理論などに業績を残した。
- 5) 水素原子のラムシフトを初めて理論的に説明。R・ファインマン(参考資料5)、F・ダイソンらと共同研究をし、量子電磁力学の基礎付けに重要な貢献をした。

核融合、衝撃波、天体物理学、ニュートリノ反応など幅広く物理学に精通したペーテは、最前線の研究を晩年に至るまで続けた。亡くなるつい数年前まで現役で研究をしていた(2001年10月の論文が最後)。晩年(93歳)には市民向けに量子力学についての講演も行なっている。そのときの講演はインターネット上に公開されている。75年にも及ぶ研究者としての歴史的体験を織り交ぜながら、高度な数学は使わないうで説明をしていく。これは米国の大学における「オープン・アクセス」運動の、先進的な取り組みの1つと言える。娘が、日本文化に関心を持っていた事から、日本に対する関心が深かったと言われる。

謹厳実直なペーテについて語られているエピソードには華々しいものはないが、以下にいくつかを紹介する。

1) 数学が得意だったペーテが大学で理論物理学を専攻するようになった理由は“Mathematics seemed to prove things that are obvious.”(数学は自明のことを証明しようとするように思える)からであった。

2) 「フォン・ノイマンのような頭脳は人類を超える種のものではないか」。マンハッタン計画で同僚であったフォン・ノイマン(参考資料6)について語った言葉はペーテによるものであったため有名になった。

3) ペーテは研究に対しては徹底した完璧主義者であり、研究のやり残しはほとんどない。普通の研究者が研究を發表した後には、やり残した研究課題が、はげ山の中に残る林のように残っているものだが、ペーテの通った後には雑草くらいしか残っていない。後続の研究者は、その

後の実験などの進歩を使って、彼の理論に基づいた計算をするくらいしかない(参考資料7)。

4) “He ruled out my theory.”(彼はわしの理論をつぶしおった。)太陽からくるニュートリノの精密観測が、日本・アメリカ連合チームとカナダ・アメリカ・イギリス連合チームによって行われた(スーパークミオカンデ)。そのリーダーであった故戸塚洋二氏が、2001年コーネル大学のセミナーで話す機会があった時の話。彼とは戸塚氏のこと(参考資料7)。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』「ハンス・ペーテ」
- 2) 三河アララギ、R・オッペンハイマー、p 36、第58巻、第1号(2011)
- 3) J・ウィルソン編『原爆を作った科学者たち』、岩波書店
- 4) 「戸塚洋二の科学入門」: <http://kenbunden.net/totsuka/02/03.html>
- 5) 三河アララギ、R・ファインマン、p 36、第57巻、第12号(2010)
- 6) 三河アララギ、J・フォン・ノイマン、p 36、第58巻、第10号(2011)
- 7) 「戸塚洋二の科学入門」: <http://kenbunden.net/totsuka/02/04.html>

斎藤茂吉と御津磯夫 三

「月虹」 鮫島 満

右の歌は茂吉の日記に、

午前九時五十分蒲郡発、御油駅下車、三河宝飯郡御津町御馬（おんま）ノ今泉忠男氏（アララギ会員）ニ案内ネガヒ、安礼崎（御津町下佐脇 新田（しんでん）、ソレカラ、国府（コフ）町、御油（ゴユ）町ヲ経テ宮路山ニノボリ、六時二分発ニテ岐阜ニムカフ、堀内君発熱（三十九度）、長良ホテル投宿、小池順三君世話ス、堀内君下痢発熱。

（昭和十六年十一月二十一日）

とあるときのことを回想したものと思われる。茂吉はこのときのことを、歌集『霜』の中に、「万葉の阿礼崎は現在宝飯郡御津町大字下佐脇新田に当る。右、御津町御馬、今泉忠男氏の考証によれり。十一月二十一日今泉氏は堀内氏及び予を導きて万葉の古跡に及ぶ」という詞書のもとに、

万葉のいにしへの代の阿礼の埼考証し来れば雨ふりしきる
引馬野にほひし萩をみとめむと宮路山べをのぼりつつをり

など七首を残している。また、この訪問の後には、「今般御地に罷出候節は一方ならぬ御芳情をかうむり：御蔭で引馬野も阿礼の埼も見学幸福至極に存じ奉り候」と礼状を送っている。さらに、茂吉は第二次大戦中山形県金瓶村の疎開先から今泉に書いた手紙の中に、「いつぞや堀内君と共に御厄介になりましたことをおもひだしてをります。あの節御馳走になりしことも忘却いたしません」（昭和二十年、月日不詳）とその時のことを書いている。また、金瓶から移り住んだ大石田を後にして帰京した家から書いた今泉への書簡に、「この体で御地をまた踏むことが出来ましたならばどんなに幸福かとおもふことがありますどうぞ御両親さん皆々様によるしくあの時、堀内君下痢したことをおもひ出し小生の（み御馳走沢山いただいたことを想起します）」（昭和二十二年十一月二十七日付）と書いて、堀内が下痢発熱したことでまで思い出している。今泉家訪問の印象が強かった証でもある。

三 磯夫の茂吉詠

御津磯夫には師の茂吉を詠んだ歌が数十首ある。以下、それらの作品についての感想と私見を述べていく。

夜の虹しばらく見むと佇ちしとき野路ほそくして人に逢ひにき

昭和二十三年 『陀兜囉の花』

前々号で述べたことであるが、磯夫は夜の虹の制作事情を尋ねたことに對する茂吉からの書簡（昭和十二年）を受け取っている。このころ磯夫が夜の虹を詠んだことが茂吉の書簡によって分かるのだが、残念ながらその歌を探すことができないでいる。右の歌は、師に習って夜の虹を詠もうとしたことを想像させる。月夜の野路に佇んでいる作者の姿がおぼろに見え、たまたまそこを歩いてきた人の姿が幻想的である。磯夫は右の茂吉からの手紙のことを思い出して、

夜の虹のおぼろに白きはかなさを強羅よりわれに教へたまひき

と詠んでいる。昭和十二年、茂吉は、「中空に月はかがやき西の峽ただよふ雲に虹おほおほし」（『寒雲』）など三首に夜の虹を詠んでいる。

「のぼり路」ほかの検閲を幾度か潜りて衛生部見習士官の印を残せる

昭和二十六年 『陀兜囉の花』

茂吉の歌集『のぼり路』は昭和十八年に刊行されている。日中戦争に関わる歌、皇紀二千六百年奉祝歌など戦意高揚の作

品が多く、戦地に持って行った兵士も少なくなかったという。磯夫も昭和十八年にはこの歌集を持って戦地に赴いていた。一首は、茂吉の歌集が何度も軍の検閲を受けた印を留めていることを詠んでいる。「潜りて」の言葉に兵たりし磯夫の感慨がある。

君と見し御津の噴井はとどまらず透る春陽に微塵さへなく

昭和二十八年 『陀兜囉の花』

阿礼の埼もとめゆきつつ冬くさのなびく噴井をこえたまひにき

昭和三十一年 同

砂畑吹きこす風に君が見し噴井の水のけふもきらきらし

同

昭和十六年に茂吉を引馬野、阿礼の埼に案内したときのことを回想した歌である。このとき茂吉は、

わきいづる水のゆたけき海のべにいしへの代の行幸おもほゆ

『霜』

など六首を残している。茂吉は、太上天皇が三河国へ行幸したときの歌（万葉集）「いづくにか船泊すらん安礼の埼こぎたみ行きし棚無し小舟」の「安礼の埼」を御津町大字下佐脇新田に特定した今泉忠男（磯夫）の考証に賛同した。

和歌から派生した季語の本意（その十七）

「笹」 佐藤喜仙

48 枯葎かれむら

「思ふ人來むと知りせば八重葎おほへる庭に珠敷かましを」

詠人知らず（万葉集）

「ふるさとは葎の宿も霜枯れて夜な夜な晴るる月の影かな」

式子内親王（続後拾遺集）

葎は元來雑草全般を指した言葉である。その中で、蔓性の二種に特定の名がついた。つまり「八重葎」と「金葎」である。どちらも蔓に刺があるが、八重葎は60〜100cm位の背丈で上に伸び、金葎は他物に絡まって地面に広がる。季語の「枯葎」の本意は蔓でからみながら蓬々と茂る雑草が、その様のままに枯れ残っているところにある。

例句

静かさや日のさしとほす枯葎

東洋城

枯葎蝶のむくろのかかりたる

風生

枯葎磔ふみわけ友の喪へ

欣一

49 鴨（真鴨・子鴨・鴨の声、鴨の陣）

「葦辺ゆく鴨の羽交に霜零りて寒き夕は大和し思ほゆ」

志貴皇子（万葉集）

「吉野なる夏実なつみの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山影にして」

湯原王（万葉集）

鴨は初冬に北地から渡來し、河川、湖沼、海上などに群れすみ春に北に帰る。種類も多いが俗に青頸あおくびと言われる真鴨が数も多く、古代から猟鳥とされた。鴨の渡る道は一定しているので、張網、高縄（竹の先に縄を張りそれに鳥糞うりちんを塗ったもの）などの方法でとっていたようである。

例句

くるくると堀江の鴨の浮寝かな

支考

鴨の声松籟松を離れ澄む

茅舎

潮に泛うく鴨の羽がひに夕明り

奏鳳

50 年の暮（歳晚・年の瀬・年尽くる・暮）

「あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつつ」

在原元方（古今集）

「数ふれば年の残りもなかりけり老いぬるばかりかなしきはなし」

和泉式部（新古今集）

師走の中頃から言うのであるが、十二月十三日に正月の準備にかかった地方が全国的に多く、その頃から年の暮の実感があつたようである。但し昨今は昔ほど年の暮の意識は高くないのが現状であろう。

例句

年くる、山里寒し塩肴

成美

下駄買うて箆笥の上や年の暮

荷風

年の瀬の夜となる早さ飾窓

立子

「氷魚」のことから (131) 岡本八千代

野球のセリーグの優勝が中日になった。八月の頃は、優勝など夢にも思わなかったほど。それが、優勝できたプロセスの不思議を思う。監督と選手たちの信頼の結びつき、その努力、何にしても一丸となった心と心がかくなつたのか、などと感動している。

野球の好きだった子規に聞いてみたい気持。

しかし、ここからはまた子規の小説、「一日物語」のつづきを書く。

八。

・女と幸助(玉吉)はある茶屋へ入った。女は、玉屋の呉服屋を知っていた。これよりいかにも二人旅のようになる。夫婦とみられるか。姉弟とみられるか。

玉吉は、六郷(病親の方)へゆくか、横手(主人の用事)の方へゆくか、迷う。

九。

・三里一直線に来て、また茶屋で一服。

・ここから車屋は替つて、今度は女が先に自分が後で車にゆられて行く。孝助はとくに嬉しい光景としてとらえている。
・ところが横手をめざしていたのに、六郷への道となつてしまつた二人。

十。

・女のためにとうとう六郷へ先にゆくことになつてしまつた孝助。

・女は、車屋が「横手へゆく道は通れない」と言つたので、「兄

の家へ寄ればいいと思つてこの道の方へ来た」と言つた。
・孝助は互いに名前を言いあつた。

女の名は「お民」：兄の家が湯田という温泉場にあるという。

孝助は「玉吉」と名のつた。

十一。

・玉吉は、とうとう兄の家に寄るといふ女と二人づれになつて行く。

・女は兄の家へ：山一つ越えて、ここから一里。玉吉は六郷へ：まだ五里も六里も。

・兄の家にやつと着いた二人。ある一軒の草屋、ここは横手。兄は山の中の樵夫。

十二。

・女は「一夜を泊つて、朝早く出かけよ」と言う。しかし、玉吉は、一刻も早く父の所へゆきたいと家を出たが、夜道はまつ暗。

・先刻の車代を女にたてかえさせたことに気づき、ひきかえしてしまふ。

十三。

・とうとう一夜を泊つてしまつた。玉吉。女は、「明日は雨かも知れない。もう一夜泊れ」と言う。兄の家を疑いながらも玉吉はついに眠つてしまつた。

十四。

・春とはいえ、奥州の山の中。「薄き蒲団一枚の夢を破られてみれば、極楽と思ひしに傾きかかりし草の屋……」であつた。

・真夜中、男と女の声がする……。次回へ

ことのはスケッチ (396)

「英訳」4

今 泉 由 利

Daniel Sommariva 援護

飛行機の小さき窓の暗闇に南十字星あり添ひ寝してゆく

High above the land amongst the clouds,
I peer through a small window,
the Southern Cross is with me.

青空に描きし摩天楼の風景に昨夜の真夜のオリオン星座

By day the blue sky shines above the
City Scape, By night the stars of Orion
illuminate the sky. I meld them together
to create a perfect memory.

この星をティラノサウルスも見しならむ地球の上に繋ぎて生きる

The stars shine brightly, forever unchanged
since pre-historic animals ruled the land.

地球上の最後の恐竜ティラノサウルス石と化したる骨の冷めたさ

The last of its kind, pre-served in stone
forever in the coldness.

和菓子街道 (62)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

杖衝坂を上りきって、何度か国道を横切りながら進むと、石薬師宿に至る。極めて規模の小さい宿場で、現在も昔以上に広がりを見せることはなく、ところどころに格子戸のある古い家を残しながら、小さな集落がそっと営まれている。

次なる庄野宿も同様で、本陣や問屋場跡の碑を確認しつつ進むと、あっと言う間に宿場町を通過してしまう。両宿とも菓子屋はおろか商店もない、ひっそりとした佇まいだ。

次に菓子に出会ったのは、城下町の亀山宿だ。御城下で延享年間(1744～1748)に暖簾を上げた瑞宝軒の名物は「亀乃尾」。初代の角屋留吉が『古今和歌集』の〈亀の尾の山の岩根をとめておつる瀧の志ら玉千代の数かも〉という紀推岳の和歌に因んで作った漉し餡入り



の餅菓子だ。細々ながら老舗が残っていることにほっとしつつ、街道筋から亀山城跡に残る多聞櫓の黒い影を仰ぎ見た。

求肥で漉し餡を包み、粉砂糖をまぶした亀乃尾。滝壺の亀の甲に跳ね散る水しぶきになぞらえたという。

◆瑞宝軒

住所: 三重県亀山市御幸町231-54

電話: 05958-2-3331

お知らせ

▽新年号原稿は、十二月一日(木)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△十二月号の編集となりました。

新年を迎える為に忙しい日が続く十二月、迎える新年のその静謐さこそ何にも替えがたい美しさとして心に染みるものです、会員の皆様は如何でしょうか。

△新年号に年賀広告を掲載します。

二千円をお送り下さい。

△新年歌会を二月に予定しています。詳細

は次号にてお知らせします。

△二十四年一月皆様にお届けの「三河アラギ・二月号」は二月二十八日の発送となります。よろしくお願ひします。(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年十一月二十五日印刷 第五十八巻 第十二号
平成二十三年十二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利

三河アララギ会

豊川市 御津町 御馬 西三七

TEL (〇五三三)七五二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

URL E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創美